3. Can-do リスト 2021

3.1. Can-do リスト 2021 の概要

本報告書では、「①授業活動別 Can-do リスト」（以下 3.2.）「②GLC（日本語）基礎学修能力 Can-do リスト」（以下 3.3.）「③基礎技能系（「日本語文法」「日本語コミュニケーション」「日本語語彙」の総称）Can-do リスト」（以下 3.4.）「④アカデミック・コンピテンス Can-do リスト」（以下 3.5.）の 4 種をまとめ、Can-do リスト 2021 として報告する。

①授業活動別 Can-do リストは、アカデミック場面として典型的且つ汎用的であると考えられる国際共修入門（講義型、講義・セミナー型、セミナー型）[1)]の授業参加に求められる行動を類型化し、それぞれの項目について Can-do リスト化したもので、A レベルの学生が、到達可能域として目指す Can-do リストである。また、このリストが問題なく行えることが「学部の授業受講に支障のないレベル」を具現化・可視化したものであり、同時に B・C レベルの指導においては目指すべき具体的指針ともなる。

②GLC（日本語）基礎学修力 Can-do リストは、主に C レベルを対象としたものである。GLC（日本語）基礎学修力は、留学生に対する指導現場、指導経験から表出し、Can-do リストとして可視化することの必要性が教員間で認められたもので、「（日本語）授業に参加し、学修を効果的に進めていくための土台となる行動習慣」と本報告書では定義づける。いわば、学修以前の、学修に対する姿勢・態度のようなものである。日本語を括弧内に表記したのは、今後 GLC における他の語学授業（英語及び中国語）や国際共修科目でも同様の試みを行い、留学生に限定せず、日本人学生も含めた形で GLC の科目を履修する際の基礎学修力へと統合する可能性を想定してのことである。

③基礎技能系 Can-do リストも C レベルを対象としたものである。第 2 章で述べた通り、「半数以上を占め、学部の授業受講に支障のある C レベルへの対応が喫緊の課題」であり、中でも基礎技能系科目の開発を最優先させる必要性があった。それは、日本語カリキュラム改編で、従来の正課外科目（補講の位置づけ）を廃止し、基礎技能系科目を正課科目として新設したため、それに見合った効果を上げることが求められたためである。C レベルの学生は、既に入学前に 1.5 年～2 年程度の日本語学修歴を有する学生が多いが、到達度から見ると、スローラーナー（slow learner）であること、学修方法と習慣が身についていないのがその原因であると同時に結果であるという特徴があった。これらの学生に対し、これまでのようなオーソドックスなアプローチで教育を繰り返してもあまり効果が見られなかったという過去の経緯があり、且つ、市販の教材（既に入学前に使用していたというものも少なくない）では興味関心を引くことすら困難で、抜本的な見直しが求められた。このような事情から、緊急度が高い基礎技能系科目ついては、Can-do リストの作成を早急に進め、Can-do リストを 2022 年度のシラバス・ルーブリック改善の際に反映させるところにまで至っている。また、教材に関しても、大学に申請した企画「留学生日本語力補強：日本語力に課題を抱える本学留学生のための教材開発」が承認されたため、基礎技能系 Can-do リスト→シラバス・評価ルーブリック改善→教材化という一連の流れに先鞭をつける形となった。本報告書では、日本語文法、日本語コミュニケーション、日本語文法

それぞれの Can-do リストを提示し、2022 年度のシラバス・ルーブリックへの反映状況までを報告する。

④アカデミック・コンピテンス Can-do リストは、上記①～③の、あるレベルに関連するリストとは切り口が異なるもので、留学生の入学時から卒業時までの「読む・書く」能力を整理し、段階的に示したものである。「卒業時」には、日本の大学院進学を目指す留学生にとっての「出口」の意味も含むため、目指すレベルは、特定の留学生を対象とした、高度なレベルとなる。また、いわゆるアカデミック・スキルでは通常中心的に扱われることの少ない、「読む・書く」際に必要とされる「思考力」も重視する点に、アカデミック・コンピテンス Can-do リストの特徴がある。

以下、それぞれの Can-do リストについて、①何のための Can-do リストか（目的）、②どのような過程を経てリスト化されたか（作成の経緯）、③Can-do リスト、④誰/どことの共有を意図したものか（共有対象）及び今後どのように活用するか（今後の展開構想）の順で報告する。

注

1）国際共修入門は、2021 年度に新規開講した科目で、留学生が多く在籍する経営学部の 1 年生全員が履修することになっている。国際共修の促進を推奨する本学において、今後の 4 年間で国際共修という学びのスタイルを当たり前の状態とするための入門的な位置づけある。国際共修入門には、「セミナー型」「講義・セミナー型」「講義型」の 3 種類があり、1 学年 300 人程度の新入生を希望（日本人学生）と日本語能力（留学生）により三つのタイプに振り分け、クラスを指定する。2021 年度は、「セミナー型」（1 クラス 20 名程度）が 4 クラス、「講義・セミナー型」（1 クラス 40 名程度）が 4 クラス、「講義型」（残り全て）が 1 クラスであった。

文責：齊藤眞美